

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2017年12月1日 発行

松蔭中学校・高等学校

校長 浅井直光

あなた方は神の畑、神の建物なのです。(コリントの信徒への手紙 I 3:9)

ボランティアからサービ斯拉ーニングへ

先月のバザーでは約1400名のご家族や卒業生の皆様にご来場いただきました。生徒の模擬店だけでなく、千と勢会（同窓会）、PTA役員、旧PTA役員の方々による売店や喫茶、神戸松蔭女子学院大学の学生による小物販売もあり、学校を挙げての大イベントが終了しました。ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。バザーの歴史は大正時代にさかのぼります。当時は神戸市中央区中山手通に学校があり、新校地や校舎建設の資金を得ることを目的として入場料も徴収していました。

現在のバザーは収益の全額を寄付することにしており、今年は8割を「チャイルドケモハウス」「保護犬保護猫カフェ」「ワンキャンププロジェクト」に、残り2割を日頃奉仕活動をしている「特別養護老人ホームきしろ荘」「神戸真生塾」そして「パン工場なないろ、にじ作業所」へ届ける予定です。

最近、ボランティアに代わってサービ斯拉ーニングという言葉が使われることが多くなりました。サービスは「奉仕」、ラーニングは「学習」を意味し、サービ斯拉ーニングは奉仕することと学習することを同時にするということになります。教室での学びを学外での奉仕に生かし、その活動体験によって学び、気付きを得るというこの教育手法は米国で始まりました。教育学者ジョン・デューイは、「子どもが太陽となり、その周囲を教育の諸々の営みが回転する」と述べています。体験を通じて獲得する学びこそ真の教育であるという彼の教育論は、児童中心主義教育(Child-centered Education)と言われ、この考え方を土壌にサービ斯拉ーニングが生まれ、日本では近年、主に大学教育のプログラムに導入され始めたのです。その教育効果についても研究が進み、生徒自身の成長のみならず、学校全体や地域社会に及ぼす効果、さらには卒業後の行動にも影響を与えることが報告されています。ボランティア活動をしてそれで終わり、ということではなく、活動後の「振り返り」によって体験から学びや気付きを得ることがポイントになっています。

松蔭のバザーは奉仕の精神をもって活動し、収益を寄付して社会貢献することが目的です。寄付先を各クラスで話し合い、事前の準備を経て、中3生と高校生はクラス単位の売店運営、中2と中1の生徒はリユース食器の回収、お箸やキャンディーレイの販売、校内清掃、寄付先を紹介するポスター掲示にと、生徒と教員が一丸となって活動しました。この取り組みをサービ斯拉ーニングの視点をもって運営することにより、学校行事としての意義と教育効果がより高まることでしょう。バザーではリユース食器の使用を推進していますが、ゴミを減らすことや食品廃棄物の問題など環境教育を組み入れたり、環境問題をテーマとするプロジェクト型学習 Blue Earth Project との連携も今後検討していきたいと考えています。

2学期の生徒活動から

2ヶ月ごとのアセンブリー（生徒集会）では、様々な分野で活躍した生徒を表彰します。国民体育大会（えひめ国体）にはアーチェリーで高2藤原沙也佳さん、馬術で高3高松みやびさんが出場、入賞しました。スポーツだけでなく実り豊かな文化・学問の秋ともなり、先日まで六甲山上の各会場で開催されていた「六甲ミーツ・アート2017」では、美術部の作品『六甲ハイチーズ』が見事グランプリを獲得しました。応募した218組から選ばれ、さらにプロの現代美術アーティストも加わる中で受賞したことは部員たちにとって大きな自信となったことでしょう。読書感想文コンクールでは、高2の中山葉月さんの『世界をひろげる』が兵庫県知事賞を受賞しました。彼女が取りあげた古内一絵（ふるうちかづえ）さんの小説「フラダン」は、震災後の福島にある高校のフラ愛好会を舞台に、「フラガールズ甲子園」への出場をめざす高校生を描いた小説です。折しも先日の高校アセンブリーでは、本校から「フラガールズ甲子園」に出場した高1有志の皆さんがフラを披露したばかりでした。中山さんは、作中の高校生が「知らない何かを知ること」に自らの被災地への思いを重ね、松蔭の修学旅行で訪問する被災地を実際に見て湧き上がるであろう思いも、新しい世界への広がりとして受け止めようと記しました。本校の読書教育の取り組みは高く評価されてきましたが、来年度の「読書活動優秀実践校」として文部科学省に推薦されることが決まっています。

その他の活動では、「英語の松蔭プロジェクト」としてスタートした、ミカエル国際学校のスクールアシスタントに今学期は高3生5名が参加し、インターナショナルスクールの環境を経験しました。3学期には高1生5名を派遣する予定です。スクールアシスタントの応募資格は英検2級以上の取得です。準1級合格者も現時点で6名にのぼります。来年1月の校内受験に向け、努力を重ねてほしいものです。高2の大学特講では、2学期後半の講座はグローバル教育の一環として中国語・韓国語・仏語から1カ国語を受講しています。本校の教育課程に第2外国語のプログラムはありませんが、英語以外のもう一つの外国語に高校時代に触れる機会を持つことは、とても重要です。ICT教育関連では、生徒貸し出し用タブレットとして新設のICT教室用45台、普通教室用の100台がそろい、一部授業で利用し始めています。今後、教員も研修を重ね、授業やオンライン英会話などに利用する予定です。また2020年大学入試改革の準備として、11月末、新センターのプレテストを高2の一部生徒が受験しました。

学校内外を舞台にした生徒一人ひとりの活動の様子を振り返るたび、冒頭の聖句を思います。聖書は、私たち人間が素晴らしいものを生み出す畑であり、その実りを神の下に与えられて生きていると説きます。教育とは、子どもの可能性を最大限に引き出すことと言われますが、キリスト教主義学校においては、一人ひとりの生徒が神の畑、神の建物となることを目標にしていることに通じます。教育の本質を見失うことなく、様々な課題に取り組みたいと思います。

ミカエル教会の小さな「竹の十字架」

入学感謝礼拝、卒業感謝礼拝を行う神戸聖ミカエル教会の聖堂の片隅に「竹の十字架」が安置されています。戦後復興の途上にある1950年、後に松蔭の校長を務める日本聖公会神戸教区の八代斌助（ひんすけ）主教は、2つの竹の十字架を携えてオーストラリアを訪問しました。（裏面に続く）

『人との融和、神への改悛（かいしゅん）』と墨で記された2つの十字架のうち、1つはキャンベラの聖ヨハネ教会の壁をくり抜いて保存されています。もう1つの十字架も長年オーストラリアにありましたが、2014年、本学院理事長の中村豊主教が現地を訪れた際に日本に返還されることになり、現在、聖堂に安置されているのです。

第二次大戦中、大東亜共栄圏を唱える日本軍は南太平洋のニューギニア島を攻撃しました。現在、パプアニューギニアとインドネシア両国に分かれているこの島では、当時委任統治領としていたオーストラリア軍と日本軍の間で激しい戦闘が繰り広げられました。両軍ともに多数の兵士が戦死し、マラリアや食糧不足による病死者、餓死者を含めて犠牲者は20万人近くに上りました。



1942年、この島を占領した日本軍が宣教師や島民などキリスト教徒を殺害する事件がありました。犠牲者の1人がオーストラリア聖公会から派遣されていたハイマン宣教師です。厳しい戦況の中、帰国せよとの連絡を受けていたにも関わらず、危険を省みず島民と共にいることを選択したのです。

戦後間もないオーストラリアでは、反日感情が非常に激しかったようですが、八代主教は竹の十字架を携え、単身でかつての敵国へ赴き、殉教したハイマン宣教師の遺族に謝罪するとともに、キリスト者として敵味方を越えた交わりこそが恨みの心を打ち砕き、美しい平和な神の国を造ることになると訴えました。彼の手でもたらされた2つの小さな竹の十字架は、敵同士であった日本・オーストラリア両国に互いの赦（ゆる）しをもたらし、その1つが今神戸に返還され、両国に1つずつ安置されているのです。八代主教は連合国占領下で、民間人として海外渡航を許可された最初の日本人として、敵国であった英国、米国、カナダなど各国を歴訪し、神の名のもとに諸国民の融和と交わりを訴え続けました。

キリスト教は「隣人を愛すること」を説きます。近い関係の人だから愛するというのではなく、遠方であっても敵味方であっても、相手を愛し、思いやり、赦（ゆる）し、大切にしようとする思いを持つことにより、自分は相手にとっての隣人になる、と言う意味だと説明されます。聖書の説く隣人愛は、民族や国家を超え、世界の人々の共生を可能とする大切な理念であることは間違いなく、70年前の竹の十字架はこのことを私たちに教えてくれているように感じています。隣人愛の精神が人類に広がり、一人ひとりの実感として存在することを理想の社会とすると、第2次大戦から戦後までを生き抜いたキリスト者として、人類の融和と世界平和を希求した八代主教の姿勢から、学ぶこと、気付かされることは数多くあります。神戸聖ミカエル教会へお越しの際にはこの十字架をご覧ください。ぜひ試してみたいかをご紹介します。

キリスト教は「隣人を愛すること」を説きます。近い関係の人だから愛するというのではなく、遠方であっても敵味方であっても、相手を愛し、思いやり、赦（ゆる）し、大切にしようとする思いを持つことにより、自分は相手にとっての隣人になる、と言う意味だと説明されます。聖書の説く隣人愛は、民族や国家を超え、世界の人々の共生を可能とする大切な理念であることは間違いなく、70年前の竹の十字架はこのことを私たちに教えてくれているように感じています。隣人愛の精神が人類に広がり、一人ひとりの実感として存在することを理想の社会とすると、第2次大戦から戦後までを生き抜いたキリスト者として、人類の融和と世界平和を希求した八代主教の姿勢から、学ぶこと、気付かされることは数多くあります。神戸聖ミカエル教会へお越しの際にはこの十字架をご覧ください。ぜひ試してみたいかをご紹介します。



神戸聖ミカエル教会の竹の十字架

「竹の十字架」の横に設置された説明パネルより（抜粋）

『ハイマン宣教師は、日本軍が占領する前に故国に帰ることができたが、自分に敵意を持っている人たちのためにも十字架上で苦しみ、死なれたイエスに倣い、ニューギニアの人たちと生死を共にするために残留を決断したのである。竹の十字架をこの祭壇に設置するにあたり、66年前、八代斌助（ひんすけ）主教が日本を代表して単身オーストラリアに渡り、この国の人たちに赦しを乞い、和解を訴え、平和を希求した姿勢を私たちも堅持することをここに誓うものである。』



ザンジバルのサルメ王女 —マイクロヒストリーから気付くこと—

世界史の先生が「ザンジバルのサルメ王女」をテーマにした歴史教育の研究会に参加したと報告してくれました。ザンジバルはアフリカ東部の沿岸にある小さな島で、現在はタンザニア連合共和国に属している人口約60万人の小さな島です。19世紀、クローブ（丁子）など香辛料の生産やインド洋とアフリカ大陸を結ぶ交易中継地として欧米各国の商人が活動しました。この島で150年前に生まれたイスラム王の娘が「サルメ王女」です。彼女は様々な民族が行き交い、外国語が飛び交う国際色豊かな王宮で生まれ、少女時代を過ごしましたが、クーデターに巻き込まれてドイツに移住しました。その後聖公会のチャペルでドイツ人男性との結婚式を挙げ、イスラムの信仰を棄てキリスト教徒になりました。夫を失い子どもが死亡する悲しみにも堪え、故国ザンジバルに戻ることなくその生涯を終えたのです。波乱に満ちた一個人の人生ということにとどまらず、20世紀の欧米列強の動きのなかで、イスラム教とキリスト教の相克や男性優位の社会、多種多様な民族や人種と国家のあり方に翻弄（ほんろう）されながらも生涯を全うした一人の女性の生き様からは、試練をものもしない強い意志の裏側に備わっていた柔軟さと寛容の心をも感じ取ることができます。社会のグローバル化という現代的な観点からも興味深いものです。

歴史学にマイクロヒストリーと呼ばれる分野があり、日本語に訳せば「小さな歴史」となります。ザンジバルの王女の研究のように、ある個人や出来事、1つの村や共同体などを対象に細部まで調査し記述する研究手法のことをいいます。毎月1回程度の放映のようですが、「ファミリーヒストリー」というTV番組があり、著名人の父母や先祖の境遇を詳細に取材してまとめた映像を本人に見せ、その様子を別のカメラで撮影しています。マイクロヒストリーの手法で家族の歴史が明かされ、自分が知らない父母の生い立ちや生き方に触れて心を揺さぶられる表情が映し出されると、テレビの前の私も自分の人生が、父母やその家族の生涯に深く固くつながっているという思いを持ちます。最近の放映では、ミュージシャン・アーティストのオノヨーコさん、ノーベル賞学者の山中伸弥さんなどが取りあげられていて大変興味深く視聴しました。

マイクロヒストリーが私たちに伝える「竹の十字架」や「ザンジバルの王女」そして「ファミリーヒストリー」は私たちとは直接の接点はありませんし知らなくても済むことです。しかし明かされる一つひとつの事実や人生と向き合い、丁寧にその歴史を追っていく時、どこかの時点で自分の行動の指針となったり、生き方のヒントを見つけたりできるように思います。ネット上には世界中のありとあらゆる情報が慌ただしくアップされ、言わばむき出しの状態に私たちに迫ってきます。落ち着いて「小さな歴史」に触れてみることは、心の安定にも役立つのではないかと感じています。